荒木光太郎文書 226

會議記要(五)

日時　昭和十八年十月二十八日午後時

場所　國家資力研究所會議室

記

國家資力研究所研究局會議は荒木理事、中川理事、平井氏、白井氏、渡邊氏、河野研究員、兒山研究員、出席の下に開催さる。本會議に於ては前回(十月二十一日)に引續き渡邊多惠子氏により國家資金の問題に關する文獻の紹介批判あり、鬼頭仁三郎氏の論文「資金計畫の課題(一橋論叢 昭和十八年二月號)」を中心として別紙の如き意見の開陳あり。之を中心に出席者の質疑應答ありたる後午後五時閉會せり。

以上

荒木光太郎文書 226

鬼頭仁三郎「資金計畫の課題」（一橋論叢 昭和十八年二月號）を中心とする國家資金關係文獻の招介批判

擔當者 渡邊 多惠子

シュンペーターが「景氣循環」に於て發展に於ける銀行の役割を規定したことに示唆を與へられ、鬼頭教授が統制經濟に於ける資金計畫當局の歷史的地位を明らかならしめんとしたことは、この論文が私共の興味を引く點である。

實に鬼頭教授は資金計畫の基準を單純再生産の確保にあるとなし、從來の理論特にビグー、ハイエクに於ける「資金維持」の理論を批判しておられる。

第一の點、即ち、資金計畫當局の歷史的地位に關しては、簡單に云えば、社會主義に於ける裁定機關は生産手段の移轉についても命令を發すれば

足るのであるが、自由主義經濟に於ては、銀行の信用創造によるか貯蓄よりの貸出しを通じてシユンペーターの所謂「革新」が間接に行はれる。銀行の信用創造による「革新」はシユンペーターによつて、特別の重要性を與へられたものであるが、鬼頭教授はこの點に著目し、自由主義下に於ける銀行は、シユンペーターの構想に近づき得ないものであるとなされ、この構想を實現するものは國家資金計畫當局であるとされてゐる。

國家資金計畫當局は、その特質として社會主義の裁定機關よりは遙かに多面的である。それは銀行の如く物の計畫に無關心であり得ないと共に社會主義當局の如く資金拔きの命令のみをもつて足るものでもない。貨幣經濟の全面に亙る計畫性をもつことが要求せられる。そこで、物動計畫と資金計畫との相互規定性を主張せられる。

鬼頭氏のこの點に關する御見解は一片の思ひ付きの如く見ゆるが、然し、貨幣經濟について、又その統制について日夜苦慮し思索する政治家、

研究家の胸に一脈の共感を起さしめる力のあることは私の深く敬意を表するところである。實體經濟と貨幣經濟といふ困難な課題、しかも我々が力を竭して解決せねばならない課題を非常に印象的に述べられたからである。

第二の點、資金計畫の基準として單純再生産の維持をあげられたが、この場合の單純再生産の説明は未だ積極的ではない。私共はかつて中山教授の「國家資力と國民所得」について考へた際と同様に、こゝでも物財的見地と價値的見地、國民經濟的見地と企業的見地の混合から完全に脱出せねばならないと思はれる。鬼頭教授もその意向を示されたが、解決は示されてゐない。私共は資金計畫當局の立場を理論づける體系の樹立を通じてこの問題を今後解決してゆかねばならないと思ふ。